

女子高生、中古音を学ぶ(5)

中村雅之

1. 卒業試験に挑戦

月曜の午後、若菜はいつものように仙人からの宿題に取り組んでいた。今回の宿題は、中古音における以下の再構音の根拠を考えよ、というものだった。若菜の高校卒業が近づいてきたので、区切りとしての‘卒業試験’なのだという。

果摂1等‘歌’[ka] (後舌広母音)

仮摂2等‘家’[ka] (前舌広母音)

仙人が韻鏡の構成を説明するために山摂の配置を示した時にも、1等が[-an]で2等が[-an]だったから、1等の主母音[a]、2等の主母音[a]というのが/a/系における一般的な配置なのだろう。仙人は後期中古音の音価だとわざわざ断っていたから、前期中古音ではもう少し複雑なのかも知れない。さて、問題は後舌広母音[a]と前舌広母音[a]という違いが、どのような根拠によって再構されたかという点だ。

まず、日本語では、‘歌’の音読みは1種類しかないから、呉音も漢音も‘カ’だろう。歌韻のほかの字を見ても、多・何・羅など、すべてア段の読みしかない。一方、‘家’は呉音が家来(ケライ)・御家人(ゴケニン)の‘ケ’、漢音が家族(カゾク)・国家(コッカ)の‘カ’だ。家の属する麻韻を見ると、ほとんどがア段で読むものばかりだが、上声馬韻を見ると、駿馬(シュンメ)の馬、仮病(ケビョウ)の仮(假)、上下(ジョウゲ)の下などがあるから、仮摂2等は呉音でエ段、漢音でア段というのが通例と見てよさそうだ。

仙人は、朝鮮語(歌・家ともにガ[ka])とベトナム語(歌ca、家gia)の表記を参考にしてもよいと言っていた。これらの例によれば、朝鮮語は日本の漢音と同じように、果摂1等と仮摂2等の区別がなく、ベトナム語は日本の呉音に似て、1等と2等を区別している。

以上で分かることは、1等韻よりも2等韻の方が‘エ’に近い、つまり発音する際の舌の位置が前寄りらしいということだ。しかし、これだけでは1等[a]、2等[æ]の可能性もある。北京音を見てみよう。

北京音では歌はgē[kɛ]、家はjiā[tɕia]である。歌韻の他の字を見ると、多duō・他tā・何hé・羅luóと何やら不統一だ。麻韻の2等の字を見ると、巴bā・拏ná(=拿)・嘉jiā、上声馬韻2等の馬mǎ・下xià、去声禡韻2等の駕jià・亜yàなど、韻母は-aまたは-iaである。-iaは牙音と喉音に現れるようだ。

北京語における果摂1等の韻母の不統一感は、純粋な音韻変化によるものとは思えない。この辺りのことは仙人に聞こう。例から分かるのは、どうやら1等韻には前舌的な要素がないということだ。つまり、中古音で[a]のような前舌母音であったとは思えない。

以上をまとめると、次のようになった。

①日本・韓国・ベトナムの漢字音から、「歌」と「家」はどちらも中古音では [ka] に近い音だったと分かる。

②日本の呉音から、2等の「家」の方が1等の「歌」よりも前舌的な母音だったと推測できる。ベトナム漢字音や北京音もそれを支持する。

③北京音から、1等の「歌」は前舌母音ではなかったと推測できる。

④以上を勘案すると、歌 [ka]・家 [ka] と再構するのが妥当である。

2. 漢字文化圏

宿題を終えた若菜は、昨日の帰りがけに仙人がいいものを見せてあげようと言って、ベトナムの古い紙幣を見せてくれたことを思い出した。



仙人の話によると、ベトナムでは1954年まで紙幣で漢字を使用していたのだという。この紙幣は1951年に「越南民主共和」（ベトナム民主共和国）で発行されたもので、建国の父であるホー・チ・ミン（胡志明）の肖像が見える。オモテ（上図）には上方に国名「Việt Nam Dân chủ Cộng hòa」があり、その下に漢字表記「越南民主共和」が見える。ウラ（下図）に「Ngân hàng Quốc gia Việt Nam」とあるのは、「銀行・国家・越南」（すなわち「越

南国家銀行)の漢字音なのだそうだ。

仙人によれば、現在の朝鮮半島では北も南も日常的にはほとんど漢字は使用されないが、ベトナム語と同様に朝鮮語の中には無数の漢字語があり、日本・朝鮮・ベトナムの漢字音が唐代あるいはその前後の時代の発音を知る重要な手がかりになるということだった。漢字が廃止されてもなお漢字語が生きていて漢字文化圏を形成しているのだ、と若菜は不思議な気持ちになった。

3. 宿題の褒美

数日後、若菜はデパ地下で買った新宿中村屋の月餅8個入を授業料代わりに携えて、仙人の家へ行った。仙人は、月餅は大好物だと言って、キーモン(祁門)ティーを淹れてくれた。紅茶の甘い香りと共に味わう月餅はなかなか美味だった。食べ終えた後、宿題の‘歌’と‘家’の推定音価についての考察を発表すると、仙人は「よしよし、合格だ。褒美をやろう」と言って、台湾芸文印書館発行の『校正宋本広韻』と『韻鏡校注』、それに丁声樹編録、李栄参訂『古今字音対照手冊』の中華書局版をくれた。

「頂いて、よろしいのですか？」

「うむ。昔、授業で学生に必ず買わせていたものだ。予備にワシも数冊ずつ持っているのだ。これからは、しばしば参照することになるから、ここにも毎回持ってくるように。先週渡した韻鏡のコピーは書き込み用に使ってくれ」

「分かりました。ありがとうございます」

『校正宋本広韻』には巻末に索引が付いているから便利だ。所属韻と小韻代表字が分かれば、それで韻鏡の位置も分かる。『古今字音対照手冊』は韻母による配列だが、すぐに慣れる。これで個々の字の音韻情報が確認できる」

「あ、例の‘山合一平桓端’という、アレですね」

「そうだ。広韻の反切も分かるし、非常に有用だ」

「何だかいよいよ専門的な分野に入っていくようで、少し緊張します」

「なあに、専門家を目指す訳ではない。頭の体操だと思って取り組めばいい」

「そうですね。とりあえずの目標は、杜甫や李白の詩を‘ざっくり中古音’を読めるようになることです」

「それでいい」

4. 歌戈魚虞模古読論争

「ところで、‘歌’の古代の発音については、100年余り前の中国で話題になったことがある。その頃はカールグレンの研究結果が順次公表されている時期だったが、フランス語で書かれたこともあって、中国人たちにはほとんど知られていなかった」

「100年前に何があったのですか？」

「1923年に、汪榮宝という人が「歌戈魚虞模古讀考」という論文を発表した。歌戈魚虞模の諸韻が古代においてどのような音だったかを論じたものだ。これは中国人が古代の中国語の具体的な音価を論じた最初のものと言っていいだろう。歌・戈韻は唐宋以前には-aで、魚・虞・模韻も魏晉以前は-aだった、というのが彼の結論だが、当時このテーマは大きな論争を呼んだ。歌戈魚虞模古讀論争と呼ばれている」

「魚・虞・模韻が魏晉以前は-aだったというのは驚きですが、歌・戈韻が-aというのはそれほど意外ではありませんね」

「日本人が聞けばそうだろうが、当時の中国語の発音は、歌・戈韻が-o、魚・虞・模韻が-u/-üだった訳だから、その論は相当に衝撃だっただろうな」

「歌・戈韻が-oですか？」

「当時の学者たちは南方の出身者が多かったからな。その学者たちにとっては、北京語よりも南京官話の方が馴染みがあったようだ。明清代を通じて、役人たちの公用語では南京の発音を標準とした。19世紀のアヘン戦争以降、北京語が外交言語として幅を利かせてくるが、1920年代でもまだ南京官話は影響力を持っていた。その南京官話では歌・戈韻は-oなのだ」

「古代に-aだったとした根拠は何だったのでしょうか？」

「主なものは日本漢字音と梵漢対音だ。梵漢対音というのは、仏典や歴史書に見られる梵語（サンスクリット）の漢字音訳だ。Buddhaを‘浮屠（魏書釋老志）’、‘浮圖（後漢書襄楷傳）’と音訳する類だ。ここではdhaに対して、模韻の‘屠、圖’を当てているから、古くは-aだったという訳だ。もっとも、この例に対しては疑義も唱えられているが、今は触れないでおく」

「結局、汪榮宝の説は認められたのですか？」

「まあ、70点という所かな。今の目で見ると、資料の扱いがやや雑だったのと、歌韻と麻韻の違いなどの考察にまで踏み込んでいないのが難点だ。しかし、狭い範囲ではあるものの、中国人自身によって音韻史の考察がなされたという点において、大いに評価すべきだろう。1940年に出たカールグレンの著作“*Grammata Serica*”では魚・虞・模の上古音に-oを当てているが、後の研究者は主母音を-aに修正している。これは汪榮宝の影響と言ってよい」

「それまでは、近代的な音韻史の研究はなかったのですか？」

「うむ。中国人はそれまで、唐詩とは異なる状況を示す詩経の押韻にしか興味がなかった。詩経が儒教の経典だったこともあるが、清代には詩経を材料として、韻部の分類を精密にすることだけに集中していたのだ。ところが汪榮宝の論文によって、古代の具体的な音価を議論せざるを得なくなったという訳だ」

「汪榮宝はどうして日本漢字音や梵漢対音を利用しようと思ったのでしょうか？」

「時代の空気かな。1840年に起こったアヘン戦争ではイギリスに敗れ、1894年の日清戦争では日本に敗れた。そのために必然的に外国に目を向けざるを得なくなったのだろう。日本語や梵語に関わる資料に目を向けたのも、そうした時代の流れと無関係ではないと思う」

「先生は前に、本格的な中国語音韻史の研究はカールグレン (Bernhard Karlgren, 1889-1978 年) に始まると仰いました。これは汪榮宝とは関係がないのですね」

「無関係だ。何しろ、カールグレンの記念碑的な著作である “*Études sur la phonologie chinoise*” の第 1 冊が書かれたのが 1915 年。全 4 冊が完成するのが 1926 年だ。1923 年の汪榮宝の論文とは互いに無関係だろう。しかし、歌戈魚虞模古読論争によって中国語音韻史への興味が高まり、そのような古音研究の盛り上がりの延長として、カールグレンの著作の漢訳が計画され、趙元任・羅常培・李方桂によって『中国音韻学研究』として 1936 年に完成する。戦時下だったこともあり、実際の出版は 1940 年だ。この漢訳本の出版以降、中国と日本の研究者も多く中古音研究に関わることになり、カールグレン説の修正という形で、中古音研究が発展することになる」

「つまり、汪榮宝の古音研究そのものはまだ精密なものとは言えなかったけれども、近代的な音韻史研究への助走、あるいはウォーミング・アップとしての役割を果たしたということでしょうか」

「まさに、そのとおりだ」

5. 果撮 1 等の不統一な北京音

「先生、話は変わるのですが、宿題で‘歌’の音価を考えた時に、歌韻の字を北京音で読んでみたら、多 duō・他 tā・何 hé・羅 luó という風に、非常に不統一だったのですが、どうしてこういうことになったのでしょうか？」

「ふむ。それは南京官話の影響だ。南京官話というのは今の呼び名で、歴史的には単に官話と称していた。19 世紀後半以降に北京官話が徐々に優勢になってきたので、それと区別するために南京官話という。要するに、南京の発音を標準とするか、北京を標準とするかという話だ」

「私たちは中国語というと北京語をイメージしてしまうのですが、先生の話だと、明清代には南京の発音が優勢だったということでしたね」

「そのとおりだ。朱元璋が元朝の統治者だったモンゴル人を北方に追いやって明朝を建てたのが 1368 年。その時の都が南京だ。それ以来、南京の言語が役人たちの公用語になる。果撮 1 等の北京音と南京音の状況は次の通りだ」

	歌	果	多	羅	左	坐
中古音	[ka]	[kua]	[ta]	[la]	[tsa]	[dzua]
北京音 (14c.)	[kɤ]	[kuɔ]	[tɤ]	[lɤ]	[tsɤ]	[tsuɔ]
南京音	[ko]	[ko]	[to]	[lo]	[tso]	[tso]
現代北京音	[kɤ]	[kuɔ]	[tuɔ]	[luɔ]	[tsuɔ]	[tsuɔ]

「南京音は開口も合口も区別がないのですね。すべて-o です」

「うむ。20 世紀の調査でも南京音の状況は変わっていない。北京音では 14 世紀までは開口

と合口の区別が明瞭だったのだが、16 世紀以降は南京音の影響ですっかり不明瞭になった。現代音では舌音と歯音はすべて合口の-u_o になり、牙音・喉音についても、上の表だと開合の区別が保たれているように見えるが、実際にはかなり乱れている。合口の‘科・課’が[kʰɤ] になったり、開口の‘我’が[u_o] になったりした」

「南京音の影響というのは、具体的にはどういうことでしょうか？」

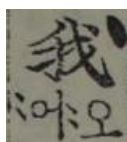
「1368 年に明朝が起ると、半世紀あまりの間首都が南京に置かれた。これにより、南京の言語が影響力をもつことになり、全国の役人たちの標準語つまり‘官話’になった。ところが、永楽帝が 1421 年に北京に遷都したので、南京の役人も多く北京に移動した。それによって、南京の言語が新しい首都の北京へと流入することになった。北京語は否応なく役人たちの言語の影響を受けてしまったという訳だ」

「その影響というのが、今ひとつピンとこないのですが」

「分かりやすい例を挙げようか。15 世紀の前半まで、北京では‘わたし’を‘我 [ɣ]’と発音していた。今のピンインならば w と書くところだ。我は果摂 1 等開口だから、北京語としては自然な音韻変化だ。そして‘われわれ’は‘俺毎 [amməi]’とか‘咱毎 [tsaməi]’と言っていた。毎が複数語尾だったのだ。ところが、南京からやって来た役人たちは‘われわれ’を‘我們 [ŋomən]’と言っていた。そこで、北京の役人たちもそれを真似して、北京訛りで [u_omən] と発音することにした。北京語には ŋ- という声母も、-o という単母音もなかったからだ。そうして、今の北京でも‘われわれ’は‘我們 [u_omən]’と言うわけだな。つまり、南京の発音に影響されるというのは、語彙を丸ごと受け入れて、その発音を真似するということだ」

「なるほど。イメージが湧いてきました。人称代名詞が交代してしまうほど、南京官話の影響は大きかったのですね。でも、どうしてそれほど具体的に分かるのでしょうか？」

「14 世紀以降は対音資料が豊富にあるのだ。15 世紀～16 世紀初頭の状況を如実に示す資料としては、『老乞大 (ろうきつだい)』がある。これは李氏朝鮮の通訳養成機関である司訳院という役所で中国語会話のテキストとして利用されていたものだが、頻りに改訂されたので多くのヴァージョンが今に伝わっている。その一つに、16 世紀初頭に崔世珍 (サイセイチン) という人がハングルで漢字の発音を記したものがある。‘我’の部分だけを示そう」



「2 種類の発音が付いていますね」

「うむ。それぞれの漢字に 2 種類ずつ記されている。左の音は 15 世紀前半の北京音を記した資料からの引用で、右は崔世珍自らが記した 16 世紀初頭の北京音だ。左は‘어’で右は‘오’とある。ハングルの左の二つの点は声調を示したものなので無視してくれ。細かい説明は省くが、左が [ɣ]、右が [u_o] を表している。左が伝統的な北京音で、右が南京官話の影響を受けた後の発音だ。これによって、15 世紀半ばと 16 世紀初頭の間、つまり 15 世

紀後半にこの交代が起こったと推測できる。南京から北京への遷都が1421年だから、北京語は数十年を経て南京風に変わったということになる」

6. 軽唇音化

少し休憩しようと言って、仙人はジャスミン・ティーを淹れてくれた。仙人の家にはいろいろな種類のお茶があるようだ。

「君はロシア語をやっていたな。ロシア語でお茶を何という？」

「お茶は чай (čaj) です。インド紅茶の‘チャイ’と同じですね」

「語源を知っているかな？」

「それはもちろん中国語の‘茶 chá’ではないのですか」

「まあ、そうなのだが、面白い説がある。ロシア語では母音終わりの外来語を受け入れる際にしばしば半母音の-й を付けるというのだ。仏語 héros や英語 hero に対応する герой (geroj、英雄)、仏語 musée から入った музей (muzej、博物館) の類だ。だから中国語の茶 chá から入った чай (čaj) も同様に-й が付いたという説だ」

「なるほど。それは面白いです」

「しかし、この説の難点は、モンゴル語・トルコ語・ヒンディー語・ペルシア語などでも広く chai という語形であることを説明できないことだ」

「ああ、確かにロシア語だけの問題ではないですね」

「比較的有力な説としては、‘茶葉 cháyè’ が変形したものではないかというのだが」

「うーん、茶葉 cháyè から chai になりますかね」

「村山七郎というモンゴル語学者はかつて、茶葉 cháyè がモンゴル語に入った後、第1音節に強勢があるというモンゴル語の特徴から、末音が弱化して chai になり、それがロシア語に入ったという説を唱えたことがある」

「おお、それも面白いです。すると、トルコ語やペルシア語もモンゴル語からの借用ということになりますか……」

「そういうことになるなァ。そのあたりが果たして説得力があるかどうか、何とも言えない。まあ、お茶の話はこれ位にして、本題に入ろうか」

「はい」

「今日からは中古音の個別のテーマに入る。これからは前期中古音と後期中古音の違いが重要になるから、そこに注意して聞いてくれ」

「これまでは‘ざっくり中古音’でしたが、細部に分け入るのですね」

「うむ。今日はまずは軽唇音化の話だ。中国音韻学では p-のような両唇音を重唇音というのに対して、f-のような唇歯音を軽唇音という。そして、重唇音の一部が軽唇音に変わるのが軽唇音化だ」

「ということは、p-から f-になるということですね。日本語に似ています」

「そうだな。これは世界中の多くの言語に見られる現象だ。日本語では語頭の p-が両唇摩擦音の φ-になり、さらに h-になった。モンゴル語でも類似の変化が起こったが、15世紀頃からはさらに h-が脱落してゼロになった。古代ギリシア語では無気音の p-と有気音の ph-があったが、ph-がすべて f-に変わった。そして中国語の場合には、重唇音 p-/p^h-/b-/m-の一部分のみが一定の条件下で軽唇音化した」

「重唇音は 36 字母の幫滂並明ですね」

「うむ。そして、そこから分かれ出た軽唇音が非敷奉微だ。その音価は f-/f^h-/v-/mj-と表記されることが多い。ただし、f^h-は理論上のもので、唐代後期の反切では非母と敷母を区別しないから、実際には敷母も f-だ。微母の mj-も理論的なものだが、これは長安では非鼻音化を経て v-になり、北京では w-【すなわち介音-u-】になる。全濁音の奉母 v-も清音化を経て f-になるから、結局、現代北京音では非敷奉母がすべて f-、微母が w-になる」

「非敷奉微の軽唇音は、いつ重唇音から分離したのですか？」

「玉篇などの南方の資料ではすでに 6 世紀の反切に重唇音と軽唇音を分ける傾向が顕著に出ている。北方では、玄奘（ゲンジョウ、602-664 年）による陀羅尼（ダラニ）の音訳漢字が軽唇音化を確認できる最も古い資料だ。陀羅尼というのは梵語で唱えられる呪文で、梵語音に漢字を当てた資料だ。そこでは原則として奉母字が梵語の v-のみに用いられ、b-/bh-には用いられない。また、梵語の p-に対して幫母のみが用いられ非母は用いられない。同様に m-に対しては明母のみで微母は使用されない。つまり、7 世紀中葉にはすでに軽唇音化が起っていたと考えられる」

「かなり早いですね。切韻でも軽唇音化していたのですか？」

「通説では、切韻ではまだ軽唇音化が起きていないとされている」

「その根拠は？」

「反切だ。広韻には兵（甫明切）・平（符兵切）・明（武兵切）のように、重唇音の字に対して軽唇音の反切上字を用いる例が非常に多い。そのことは北京音で読んでも分かるはずだ。この状況を矛盾なく説明するためには、後に軽唇音化する甫・符・武も切韻の時代にはまだ重唇音 p-/b-/m-だったと考えざるを得ない」

「なるほど。しかし、601 年に編纂された切韻では軽唇音化が起きていなかったのに、わずか数十年後の 7 世紀中葉の陀羅尼で軽唇音化が見られるというのは、少し引っかかるものがあります」

「まあ、それが普通の感覚だな。ワシも、実際には切韻の時代にすでに軽唇音化が生じていたと想定する方が自然だと思う。切韻の反切は伝統的な表記をそのまま利用しただけかも知れない。一般に、どの資料を見ても、韻母よりは声母に対して非常に保守的な傾向がある。玄奘と同時代の玄奘（ゲンノウ）による仏典の注釈書である一切経音義（いっさいきょうおんぎ）の反切でも軽唇音化は確認できない。反切資料では 720 年頃の慧苑（エオン）音義に至って、やっと重唇音と軽唇音の分離が確認されるのだ」

「でも前期中古音を切韻の体系と規定する以上、理論上は前期中古音に軽唇音なしという

ことになるのでしょうかね」

「そうせざるを得ないなァ。」

7. 軽唇音化の条件

「重唇音の一部が軽唇音化したということですけど、どのような条件下で起こったのですか？」

「第一の条件は-i-介音を持つことだ。つまり、3等韻において軽唇音化は起こった」

「えーと、4等韻も-i-介音をもっていたのでは？」

「それは後期中古音の話だ。前期中古音では4等韻は-i-介音を持たない直音だったと考えられている」

「え？」

「この話はこれだけで一つのテーマになるので、詳しい説明は省く。今は効撰の場合を例に、韻鏡風に図式化しておくので、これで雰囲気把握してくれ。前期中古音の再構音価は平山久雄（1967）「中古漢語の音韻」（『中国文化叢書1言語』大修館）のものだ」

	前期中古音		後期中古音
1等	-au		-au
2等	-au		-au
3等	-iɛu		-iɛu
4等	-eu	>	-iɛu

「つまり、韻鏡は後期中古音の体系に基づいて図式化したということですか？」

「うむ。韻鏡の祖型が唐代中期か後期に出来たとしたら、当然そういうことになる」

「4等韻を直音で発音している現代方言はあるのでしょうか？」

「いや、主要方言にはない。だからカールグレンは3等韻を-jäu、4等韻を-ieuのように再構したのだ。比較言語学の方法論に基づけば、それは自然な推定だ」

「それがどうして修正されたのですか？」

「それを話すと主題がどんどんズレてしまうから、4等韻の話は次回以降に回そう。今は軽唇音化の話だ」

「そうでした。軽唇音化は3等韻でのみ起こったと」

「うむ。それが第一の条件だ。しかし、3等韻でも軽唇音化を生じた韻と生じなかった韻がある。第二の条件は、主母音が前舌母音でないことだ。つまり、中舌・後舌の主母音と拗介音-i-を持っていることが軽唇音化の条件ということになる。細かいことを言うと、介音は-i-でなく-i-なのだが、それも4等韻の話と一緒にやることにしよう」

「何だか、軽唇音化の条件だけでも、かなり複雑ですね」

「具体的な例を挙げた方が分かりやすいだろう。山撰には3等韻が二つある。仙韻と元韻だ。前期中古音では仙韻の主母音が前舌のɛ、元韻の主母音が後舌のʌだ。再構音価は研究者によって多少の違いがある。元韻の主母音をカールグレンは中舌のɐとしていた。どちら

でも非前舌母音であることに変わりはない。平声仙韻には適当な例がないので、去声と入声の例を挙げておこう」

		前期中古音		後期中古音
線韻 (仙韻去声)	變	pɪɛn		pɪɛn
願韻 (元韻去声)	販	pɪʌn	→	fʌn (>fan) 【軽唇音化】
薛韻 (仙韻入声)	別	bɪɛt		bɪɛt
月韻 (元韻入声)	伐	bɪʌt	→	vʌt (>fat) 【軽唇音化】

「つまり、pɪɛ-/bɪɛ-は軽唇音化しなかったけれど、pɪʌ-/bɪʌ-は軽唇音化したということですね」

「そういうことだ。ちなみに、唇音以外では元韻は後期中古音で仙韻に合流するので、‘建 kɪʌn>kɪɛn’ のようになる。それでは、問題を一つ出そう。‘万’は現代音で wān だが、前期中古音を推測してみよ」

「うーん、日本語で ‘マン・バン’、北京音で wān だから、微母ですね。前期中古音では明母 m-だったはず。軽唇音化したのだから、主母音は非前舌ということで、[mɪʌn] の去声ではないでしょうか」

「ご名答。大体の変化は mɪʌn>ɱʌn>wan という感じだな。ちなみに、前期中古音において仙韻が前舌主母音で、元韻が非前舌だったというのは、日本語の読みからも確認できる。仙韻は ‘綿・仙・然・連’ など全てエ段で読む。一方、元韻は漢音ではエ段だが、呉音では ‘煩 (煩惱)・言 (無言)・反 (謀反)・建 (建立)’ などオ段で読むものが多い。また、元韻は漢音では仙韻と同じくエ段に読むのが通例だが、軽唇音化を経た ‘煩 (煩雜)・反 (反対)’ などはア段になる。これは直音化を反映しているのだろう」

「つまりですね、前期中古音の建 kɪʌn・煩 bɪʌn を反映した呉音は ‘コン・ボン’ で、後期中古音の建 kɪɛn・煩 vʌn>fan を反映した漢音は ‘ケン・ハン’ ということですか。推定音価が日本の呉音漢音とピッタリ合っています！」

「それは当然だ。事実を説明できるように理論を組み立てているのだから」

8. 通摂と流摂の軽唇音化

「軽唇音化はまず通摂と流摂から始まったとワシは思っている」

「それは、またどうして？」

「大雑把に言えば、通摂は /-əuŋ/ タイプで、流摂は /-əu/ タイプだが、その 3 等韻は軽唇音化した他の摂と同様に -ɪ- 介音と非前舌主母音という軽唇音化の条件を備えている。実際に、東韻 3 等非母の ‘風’ や入声の屋韻 3 等非母 ‘福’ などは軽唇音化しているし、敷母と奉母も同様だ。しかし、東韻 3 等明母の ‘蒼 (莫中切)’ やその去声 ‘夢 (莫鳳切)’、さらに入声の屋韻 3 等明母の ‘目 (莫六切)’ は軽唇音化しなかった。現代音でも m- のままだ。流摂も同様に、尤韻 3 等奉母の ‘浮 (縛謀切)’ は軽唇音化した、尤韻 3 等明母 ‘謀 (莫

浮切)’は軽唇音化しなかった。前期中古音と後期中古音の推定音価を示すと以下の通りだ。前期中古音の音価は平山久雄(1967)のもの、後期中古音はそれに合わせて推定したものだ」

	前期中古音	後期中古音	
風	piǎuŋ	fǎuŋ	
夢	miǎuŋ	mǎuŋ	(軽唇音化せず)
福	piǎuk	fǎuk	
目	miǎuk	mǎuk	(軽唇音化せず)
浮	biǎu	vǎu > fǎu	
謀	miǎu	mǎu	(軽唇音化せず)

「もしも通撰と流撰の明母 3 等が軽唇音化して微母になっていれば、現代語で夢 wèng、目 wù、謀 wú になるはずなのですね」

「うむ。通撰と流撰のみが明母 3 等で軽唇音化していない。他の撰では宕撰 3 等微母‘亡・望’や止撰 3 等微母‘微・未’、あるいは臻撰 3 等微母‘文・問’のように、全て軽唇音化しているのだ。ワシの妄想では、軽唇音化はまず通撰と流撰から起こったのだと思う。その際には幫滂並(非敷奉)母の 3 等のみが軽唇音化した。後に、それを契機として他の撰でも軽唇音化が起こったが、今度は明(微)母も含めて軽唇音化した。そう考えれば、通撰と流撰の軽唇音化が他の撰の状況と異なっていることの説明が付く」

「軽唇音化は 2 段階で起こったということですね。このように音韻変化が段階的に起こることはあるのですか？」

「しばしば起こる。というよりも、そもそも音韻変化というのは、本来は段階的に起こるものなのだろう。その間隙が短い場合には、資料上は一挙に変化したように見えるのだ」

「資料から段階が窺えるものもあるのでしょうか？」

「有名なところでは、-m > -n の変化がある。中古音の -m 韻尾は 14 世紀になると -n 韻尾に変わるが、その変化はまず唇音声母を持つ音節から始まった。元代の 1324 年に作られた『中原音韻』という韻書がある。そこでは -m 韻尾を持っていた咸撰・深撰のうち、唇音声母の字だけが -n 韻尾の山撰・臻撰に登録されている。深撰を例にとれば、‘林・心’などは中原音韻でも lim や sim だったが、唇音の‘品’は p^hin になっていた」

「唇音だけが変化したのですか？」

「うむ。これは異化作用と言われる現象だ。ある音を挟んで前後に狭めの要素があると発音しにくいので、回避するために一方が変化することがよくある。-iai や -uau という韻母が現代北京語にないのは異化作用の結果だ。唇の丸めを伴う介音 -u- と韻尾の -m の共起も回避されるので、中古音で -uam のような韻母はなかった。その延長として 14 世紀には唇音声母と -m 韻尾の共起も回避されるようになって、p^him > p^hin の変化が起こったのだ。そして 14 世紀末になると唇音声母を持たない音節にもこの変化が及んだ。明初の『元朝秘史』や『華夷訳語』は漢字でモンゴル語を表記した資料だが、その漢字音訳ではモンゴル語の完了

形動詞（～シタル…）の-qsan という語尾を‘～黒三’で表している。これは sam>san の変化がすでに起こっていた証拠だ。そのような変化の結果、現代北京語には-m 韻尾がないのだ」

「つまり、-m>-n の変化は、はじめ唇音声母を持つ音節だけに起こったけれども、それを契機として変化はやがて唇音以外にも及んだ。同様に、軽唇音化ははじめ通撰と流撰のみに起こったけれども、やがて-r-介音と非前舌主母音という条件をもつ全ての音節に及んだと、こういうことですか？」

「うむ。ワシはそう思う。通撰/-əuŋ/と流撰/-əu/は韻尾に唇の丸めを伴う要素がある点が共通しているから、異化作用が働いて唇音声母の閉鎖が緩んだ結果、軽唇音化が生じたのかも知れない」

「それが契機となって、他の撰にも変化が及んだと。なるほど、歴史は韻を踏むと言いますが、音韻変化でも同じパターンが繰り返されるという訳ですね」

「まあ、そういうことかなア」

9. 南方方言の微母

「軽唇音化はすべての方言で起こったが、通撰と流撰の3等明（微）母に関しては、どの方言でも軽唇音化は起こっていない。つまり、第一波の軽唇音化はすべての方言において、破裂音の幫滂並（非敷奉）母のみで起こり、鼻音の明母では起こらなかった。しかし、第二波の軽唇音化つまり通撰・流撰以外の撰における軽唇音化では、北方においては微母も含めて軽唇音化したのに対して、南方の広東語（広州など）では微母は軽唇音化しなかった。呉方言（上海など）や客家語では両方の型が混在している」

「よくイメージできないのですが、具体例を挙げて頂けませんか」

「うむ。今日のためにあらかじめ作っておいた資料がある。カールグレンの著作の漢訳本『中国音韻学研究』の「方言字彙」から、明母3等および微母の例をいくつか取り出したものだ。軽唇音化したものには黄色の網掛けをしてある。カールグレンが収集した方言資料だが、100年前の状況がよく分かるだろう」

	北京	西安	上海	客家	広州
通撰入声「目」	mu	mu	mo	muk	muk
流撰平声「謀」	mou	mu	mə	meu	mau
宕撰平声「亡」	uaŋ	vã	mɔŋ	moŋ	moŋ
止撰上声「尾」	uei	vei	vi	mui	mei
臻撰平声「文」	uən	vẽ	vəŋ	vun	mən

「おー、なるほど。えーと、整理するとですね、非敷奉母に関しては、全ての方言で軽唇音化した。そして、微母に関しては、通撰・流撰を除いて北方方言では軽唇音化しているけれども、南方の方言では必ずしも軽唇音化している訳ではない、ということですね」

「そういうことだ」

10. 風のはなし

「先生のお話だと、通撰の韻尾-*uŋ* と流撰の韻尾-*u* の唇の丸めが唇音声母との間で異化作用を起こしたのではないか、ということでした。例えば‘風’は *piəuŋ* > *fəuŋ* ですね。でも、通撰の-*uŋ* はあくまでも仮説の韻尾でしたよね。仮説の上にさらに仮説を重ねているような気がするのですけど……」

「ふむ。それを言われると苦しいなァ。だから、ワシの説は妄想の域を出ないということだな。だが、‘風’に関して言えば、上古音では-*m* 韻尾だったから、それが前漢の終わり頃に-*m* > -*uŋ* になったというのは、さほど無理がないような気がするなァ」

「え、風は-*m* だったのですか？」

「うむ。それはほとんどの研究者の一致した見解だ。詩経では‘風’が‘心’や‘林’と頻繁に押韻しているから、-*m* だったと考えざるを得ない。何より、風の声符‘凡’が-*m* 韻尾だから、風も-*m* なのは自然だろう」

「あ、風は‘凡+虫’なのですね」

「うむ。風は古くは *pl-* や *pr-* のような二重子音を有していたとも考えられている」

「うわ、どんどん現代音や中古音から離れていきますね」

「そうだな。詩経の頃にどうだったかは分からないが、大雑把に言って、周代後期には単子音 *p-* になっていたと思う。藤堂明保という人が、飛廉 (ヒレン) について面白いことを言っている。戦国時代の詩集である『楚辞』に飛廉という風の神が出て来るのだが、それが二重子音をもっていた‘風 *pl-m*’を二音節化して‘飛 *p-* 廉 *l-m*’になったものではないかというのだ。二重子音が単子音化する際に、自然現象としての‘風’は *p-* になったが、風神を意味する際には飛廉と二音節化したのではないか、という訳だ。ちなみに、朝鮮語で風を意味する‘*param*’も関連があるかも知れないという話だったな」

「うーん、何だか壮大な話ですね。ところで、-*m* > -*uŋ* の話はどこに行ったのでしょうか？」

「おっと、脱線してしまった。要するに、風は *piuəm* のような音形だったのが、声母と韻尾に唇音があるので異化作用を起こして、韻尾が-*m* > -*uŋ* になったのではないかという話だ。14 世紀には-*m* > -*n* の変化が起こった訳だが、前漢の終わり頃には韻尾-*m* は唇の丸めを残しつつ閉鎖が緩んで-*ŋ* に変わった。つまり-*m* > -*uŋ* になった。そう考えることはさほど不自然ではないような気がするのだが、これも妄想だな」

11. *m-* と *p-* の違い

「先生、非敷奉母では軽唇音化が起こったのに、微母では起こらない場合があるというのはどういうことなのでしょう？」

「簡単に言えば、破裂音と鼻音の閉鎖の持続時間の問題だろう。例えば、*piəu* と *miəu* を比べると、どちらも非常に発音しにくい。唇の丸めを伴った声母 *p/m* から始まって、次に唇を横に引いた介音の *ɪ* が続き、その次には舌を引いて *ə* を発音し、最後にまた唇を丸めて韻尾の *u* に至る。一音節を発音するのに唇と舌の運動が忙しい。そこで発音を楽にするため

に、破裂音 p は閉鎖が緩んで、ɪ も脱落させて、fəu になる。一方、鼻音の m は p よりも閉鎖の持続時間が長いので、緩みにくい。しかし、発音しにくいことに変わりはないので、介音 ɪ を脱落させて、məu になる。大体こんなところではないだろうか」

「なるほど。同じ唇音とは言っても、破裂音と鼻音では唇を閉じている時間が違うということですか」

「そもそも、p>f に類した変化は多くの言語に見られるが、m>v とか m>w というのはそれほど一般的な変化ではない。特に m>v は、m->ɱ->ɱv->v- という唐代長安における非鼻音化も関わっているから、非常に珍しい。したがって、呉方言で微母が多く v- になるのは、長安音の影響と考えざるを得ない。前述のカーलगレンの「方言字彙」を見ると、ベトナム漢字音でも微母は‘亡 vɔŋ・尾 vi・文 ven’のように v- になるから、これも唐代長安音の影響ということになる」

「日本漢字音では、幫滂並明と非敷奉微の違いは表れないと思っていいですか？」

「基本的には違いはない。ただし、韻によっては、煩 (呉音ボン・漢音ハン)・凡 (呉音ボン・漢音ハン) のように、漢音で直音化が窺えるものもある。それぞれ煩 bɪʌŋ>vʌŋ>fan、凡 bɪʌm>vʌm>fam という変化を経て直音化したが、その際に主母音が a になった。日本漢音はそれを反映してハンと読んでいるのだ。それ以外は軽唇音化しているかどうかは日本漢字音からは分からない。頼りになるのは北京音だ。どの漢字でも f- で読むものは非敷奉母のいずれかだし、w- で読んで、かつ日本語でマ行・バ行のものは微母だ」

「分かりました。軽唇音化については何となく理解できたように思います」

「ふむ。今日はこんな所だな。いろいろと話が脱線したが、卒業前の最後の回だから、いだろう。大学の授業が始まって落ち着いたら、また来なさい」

「はい。4月からも、よろしくお願ひします！」

若菜は帰宅してから、仙人の授業を受けたこの4カ月間のことを思い出していた。最初は唐詩を当時の発音に近い形で読み上げることができればよいと思っていたのだが、中古音の概略を説明してもらってからは、自分でも呆れるくらいにのめり込んでしまった。仙人を紹介してくれた葵先生には感謝しかない。4月からは大学生だ。大学の授業も楽しみだが、仙人の講義を引き続き聞けるのも嬉しい。自分の好きな勉強が思いっきりできる。これほど幸せなことがあるだろうか。よし、学問の春、頑張るぞー！